

## ■津波の力、自分の力、つながる人の力

～「大学生泥かきボランティア隊」に参加して～

早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻修士1年 久保 洋香

私は2011年4月29日～5月3日の5日間、日本財団のロードプロジェクト「大学生泥かきボランティア隊」に参加し、宮城県石巻市に行ってきました。3.11の東日本大震災以降、連日のように目に入ってくる衝撃的なニュースを見て、自由である学生の立場だからこそ、何かしないといけないと思うと同時に、自分の「今」を自分の目で見たいと率直に思いました。また、建築を学んでいる者として、被災地の都市の被害状況と今後の復興について非常に興味がありました。活動としては、牡鹿半島にある漁港で、「瓦礫」の中から牡蠣養殖用のブイ、穴子捕獲用の筒、網など漁具の回収を行いました。家にトラックが突き刺さっている光景、RC造のビルが真横に倒れていたり、ビルの上に車が無造作にひっくり返っている様子は本当に衝撃的でした。民家の上に、そして庭に家の何倍もの大きな漁船がとまっている光景はいつまでも忘れられません。現地に行って自分の目で見てみても、何が起きているのかが分かりませんでした。途方もない作業量や復興までの道のりを考えると、ちっぽけな自分に一体何が出来るのだろうと思いました。漁船がひっくり返っている港を見たら、巨大な自然災害の前にただ呆然と立ち尽くしてしまいました。

しかし、そんな光景を目の当たりにして大切なことを思い出しました。目に入ってくる光景は「瓦礫」でも「廃墟」でもなく、被災された方々にとっては大切な「財産」であり「故郷」であるということです。漁師の方々にとっては、物資を運ぶために道を作るためとはいえ自分たちの財産が踏まれ潰され片付けられていくのは本当に心苦しかったそうです。樽と呼ばれるブイもそうです。1個あたり約15Kgで1万円以上もするブイが津波で数十メートルも内陸に流され、その回収にはあまりにも少なすぎる漁師さん達の人数。作業を通して率直に復興のお手伝いをしたいと感じたのを覚えています。初日の作業終了後、僕らの浜で数百個、全体では1500以上のブイを集めました。1日中、みんなが汗を流して、心から働いた現場は実際、ほんの少しの変化しか見られませんでした。それは本当に長い戦いであると感じました。

ボランティア活動を通して、津波の力の大きさ、自分一人のちっぽけな力を痛感しましたが、人が繋がった時の力の凄さも感じました。建築だけでなく様々な分野を専門とする学生と同じ現場で汗を流した仲間がたくさん増えました。本当に頼もしい仲間を支えられて、マスメディアを通してではなく、自ら主体的に行動していく仲間に刺激を受けました。もうすぐ震災から半年が経とうとしています。ボランティアや支援は一過性のものではなく、息の長いものにしなければなりません。今後、何らかの形で建築業界に携わる一人の若者として、地震を体験した世代として、数十年後この国を支える僕らの世代が発信して、行動していきたい。これからも僕は同じ日本人として、この国の復興を手伝っていきたく

思います。

最後の夜、同じ班の仲間 10 人と最後のミーティング。5 年後の自分に向けてそれぞれ手紙を書きました。震災で感じたこと、東北の将来のこと、日本の将来のこと。そして、一緒にボランティアをした仲間と約束をしました。いつかこの土地に帰って来て、旅館に泊まって美味しい牡蠣と穴子をたらふく食べようと。その時、持ち帰った手紙を持ち寄って酒の肴にしてみんなで石巻で語り合おうと。志の高い仲間刺激を受け、ボランティア後も友人が主催している日本の復興に関するディスカッションに参加したり、展覧会を開く団体に依頼されてメッセージを寄せたりしています。また、私自身も学内の建築機関誌で震災とボランティアに関する記事を書いたり、友人に呼びかけて子ども環境学会の「東日本大震災復興プラン国際提案競技」で活動した石巻市に対する提案を出したりと精力的に活動しています。

当初は、将来建築に関わる自分が、被災地の現状をしっかりと受け止め、大人になったら少しでも建築の力で復興のお手伝いをしたいと考えていました。しかし、被災地でひっくり返っている RC 道のビルや地盤沈下が起きている場所で満潮の度に水没してしまう場所を見て、建築は無力であり、最も重要で安全・安心な場所を作るには限界があると正直思いました。国、自治体、農業、漁業、インフラなどが綿密に連携して新しい都市の形を作らなければなりません。元の形に戻すだけでは、再び来るであろう地震や津波でまた同じことが起こる。幸い、東北には各地域に特色や地域的な遺伝子があり、地域社会がしっかりしている。だからこそ、復興はできると思う。石巻市の魚村で出会った漁師さん達、ボランティアの後も精力的に動いて活動している学生の仲間達を見て「人間は本当に強い」と感じました。どんな逆境にたっても笑顔で前に進もうとしています。政治家に国をどう託すのではなく、国民一人一人ができる範囲で行動する意識が大事だと実感しました。日本は政治家が支えているのではなく、国民一人一人がみんな支え合っていることを忘れてはならないと思う。建築に限らず、これからの復興において立場や分野が異なる人々との関係におけるリーダーの必要だろう。そんなリーダーの 1 人に自分もなりたいたいと思いました。